
地獄先生ぬ〜べ〜―再会の地獄先生―

飛妖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地獄先生ぬ〜べ〜 一再会の地獄先生一

【Nコード】

N12050

【作者名】

飛妖

【あらすじ】

童守小での最高の一年を終え九州へと行ったぬ〜べ〜は研修兼除霊と言うことで東京へとやってきた。

プロローグ

――東京。

ここに一人の霊能者がいた！

「ほお、東京はホントに人ばっかだな
九州とはえらい違いだ。」

彼の名は【鶴野 鳴介】 霊能力者で小学校の教師でもある。
通称ぬゝべゝ

「まさか、東京の学校から除霊の依頼が来るとは思わなかったな
九州から東京なんてかなり離れてるってのに・・・
校長は研修も兼ねた除霊って事で承諾してくれたが・・・
ゆきめが物凄い怒ってたな・・・」

出来るだけ早く帰れるようにせんと・・・などと言いながら道を歩
いていると

「ん？」

路地から一匹の動物がいた。

「あれは・・・管狐か？ 何でこんな所に・・・？」

管狐はキョロキョロと辺りを見回し路地の奥へと入って行く。

「追いかけてみるか・・・」

ぬゝべゝは管狐の入って行った路地の奥へと進んで行く。

すると、路地の行き止まりに占い師のような人物がいた。

「ようこそ、クダに招かれし迷い人・・・！」

「・・・」

「あ、え？」

「お前、いずなじゃないか！ 何をやってるんだこんな所で！」

「あ、あんた・・・」

0能力教師！」

「そうそう、0能力…って誰がじゃい！」

ぬゝべゝはいずなにここにいる理由などを聞く。

「なるほどな、どうせ、いずなの事だから美樹と一緒に詐欺師でも目指してるのかと思ったが違ったのか

あの頃と比べて霊力もかなり上がってるし、ちゃんと修行をしたん

だな。」

「そうだよ！

ていうか、そもそもあんたは何でここにいるんだ！ 九州はどうした！？」

「研修だよ。

九州は俺がいない間はゆきめ君と眠鬼に任せてある。」

「ふう〜ん、研修ねえ〜？」

いずながジト〜とぬ〜べ〜を見る。

「な、何だよ？」

「いや、べっつに〜」

そう言ういずなは思い出したかのようにぬ〜べ〜の左手を見る。

「あれから鬼の手とは上手くいつてんの？」

「何だウガ？」

いずながそう言うといきなり鬼の手が喋り出した。

#1 地獄先生一（前書き）

今回鬼の手は使いません。

#1 地獄先生

「うわっ！ いきなり喋んなっ！」

「知らないウガ、お前が勝手に驚いただけウガ」
ぬゝべゝの左手にある鬼の覇鬼がニュッと頭だけ出し、喋りだす。

「それより、そこら辺にいる小さいの喰ってもいいウガ？」

覇鬼はいずなの周りにいるクダ狐を食べたそうな目でみる。

「キュー！」

「ダメに決まってるだろっ！ このバカ！」

「バカとは何だウガっ！ バカと言う奴の方がバカ何だウガ！」

「何をー！？」

と、いずなと覇鬼が喧嘩をしだす。

「やめんか！ バカ共！」

あと、いずな、俺を殴るな！」

・
・

・ ・ ・ ・ ・

「ぜー、ぜー・・・

そ、そう言えば、ぬくべくはいつまでこっちにいるんだい？」

「散々殴りおって・・・

そうだな、しばらくはいると思うぞ。」

いずなはボロボロ、一番全く関係のない、ぬくべくまでボロボロである。

「そう、それじゃ、今度またゆっくり話そうよ。
電話番号教えて。」

「俺、携帯は持っていないぞ。」

「はあ！？ 信じらんない！ 今の時代持っていないなんて・・・」

「あんな、金のかかる物持てるわけないだろう。」

「貧乏すぎ・・・」

「うるさいっ！」

「そんじゃ、これ、私の電話番号だから、また今度かけて来てよい。」

番号の書いたメモを渡す。

「おー、分かった。」

「それじゃ、私帰るから。」

じゃね、といずなが立ち去る所を

「ああ、そうだ。」

ぬくべくは呼び止める。

「その、一昔前の漫画のサブキャラみたいな格好をどうにかできないのか？」

「余計なお世話だっ！」・

・
・
・
・
・
・

―後日―

「ここか、依頼の学校は。」

「おお、あなたが鶴野先生ですか！」

「あ、ええ、そうです。」

「遠い所からどうもすいません、私、この学校の校長をやっています。」

ぬゝべゝは除霊の依頼のあった学校へ来ている。
そして、校長に案内され校長室へと入る。

「それで、依頼の妖怪の件ですが。」

「はい。」

校長が話だす。

「最近我が校に妙な鳥が現れるようになりました。」

「鳥、ですか・・・」

「生徒も何人もその鳥を目撃しており、気味悪るがって学校に来ない生徒などもいるんです。」

ぬゝべゝは校長の話を真剣に聞く。

「その鳥は言うんです。いつまでゝいつまでゝと。」

「なるほど、それはきつと【以津真天】ですね。」

「いつまで?..」

「はい、以津真天とは

人のような顔、鋭い牙、尻尾は蛇で身体は鳥という、妖鳥です。
『いつまで』というのは『いつまで死体をほおっておくのか』と言う意味なんです。」

「し、死体？　我が校にはそんなものではありません！」

「それを今から俺が調べてみます。」

ぬゝべゝは自分の鞆から水晶と白衣観音経をとり出す。

「屋上に妖気かいくつかあるな・・・

これは以津真天か・・・ふむ、中庭だな・・・」

ぬゝべゝは中庭へ行く。

そこは花壇の沢山ある綺麗な場所だった。

「校長、あの一角、何故何も植えてないんですか？」

「あ、ああ、あそこは何を植えても育たなかったなのであのままなんです。」

「あそこですね。」

スコップなどありますか？」

・
・
・
・
・
・

ザクッ！ ザクッ！ ザクッ！

ぬくぬくは持ってきて貰ったスコップで花壇の何もなかった場所を掘る。

「結構深いな・・・」

ザクッ！ ザクッ！ ザクッ！ ガキン！

「・・・やっぱりか・・・」

土の中から数個の骨が出てきた。

「ひいつ、じ、人骨？」

「これは大昔前にここで亡くなった人達の骨でしょう。
しかし、供養もされず放置され続け、魂が成仏できずにこの場に縛られています。」

それが、以津真天が現れた理由でしょう。」

そう言うとなぐくはポケットに入れて置いた白衣観音経を手を持ち経文を唱える。

「南無大慈大悲救苦救難廣大靈感・・・
ここに縛られし魂よ、成仏したまえ。」

・ ・ ・ ・ ・

・ ・

「鶴野先生、今日は本当に有り難うございました。」

「いえ、また何かあったら言ってください。
それでは。」

ぬくぬくは学校から街へと歩きだす。

「・・・今日、どこに泊まろう・・・？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1205o/>

地獄先生ぬ〜べ〜―再会の地獄先生―

2010年10月13日21時37分発行